

小中高大の交流連携の必要性を実感

野坂 武秀

一 はじめに

数年来、参加者・レポーターの固定化で悩んでいるが、今回も見学旅行やその他の行事と重なり、司会者・共同研究者も一人ずつの参加で、レポートも二人で持ち寄った五本のみ。不安の幕開けではあったが、近年の傾向として大学生の参加があり、何とか急場をしのごうができた。

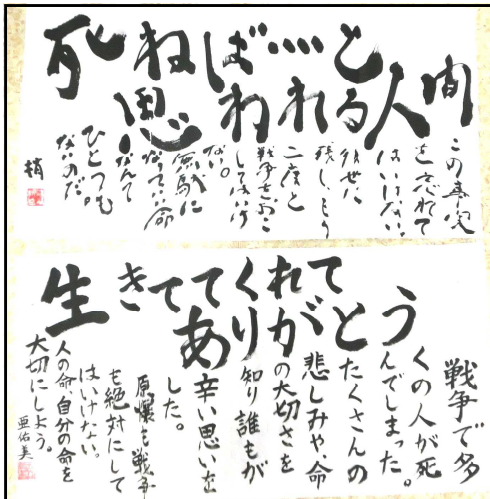
大学生の参加はたいへんありがたいことではあるが、そこからは新たな課題も見えてくる。大学の教員養成課程の問題だ。特別支援をはじめとして、困難を抱える子どもたちが増加する中で、教科指導のあり方や専門科目の学び方にも、新たなニーズが生まれているように感じられる。各教科における、小中高大の交流連携の場がますます必要だ。この分科会とこの報告が、そのような場になってくれることを願って、報告を進めたいと思う。

二 レポートの概要紹介

(1) 「今年のもやもや」

磯角報告は、ここのところ一貫して「今年のもやもや」というタイトルで、その時々の実践の中から見えてくる生徒の現状と、実践上の課題を投げかけている。

高校の芸術科目の場合、学校により実態が大きく違う。苦小牧西校は、市内で唯一、音楽書の芸術三科目がそろった学校だ。前回の学習指導要領改定で、芸術の必修単位が「3」から「2」になり、生徒数の減による間口減も



苦小牧西高校 磯角広一

重なり、全国的に芸術の持ち時数は減り、芸術三科目を開講している学校は激減した。本来は、生徒の学習権にもかかわる問題なのだが、芸術科目は受験に必要なためか、あまり大きな問題になっていないのが残念だ。

磯角実践では、積極的に創作授業が取り入れられ、書道での平和学習にも積極的に取り組んでいる。今回も、二学年の見学旅行作品の延長として、三年生でも「夕風の町桜の国」の映画鑑賞とセットにした作品を発表してくれた。

範書の悩みから生まれた取り組みとして、映像機器で書いているところを大型画面に映し出して見せる実践に取り組んでいる。十勝の研究会で、池田高校の日暮先生が同様の取り組みをしていたが、今後の普及が待たれる実践だ。

「もやもや教材」ということで、さまざまな線質を出させるトレーニングとしての「鬼の顔」「オノマトペ」が取り上げられていた。他校での実践を参考に取り組んでみて、なかなか効果実感できないという。同じ教材であっても、その時の生徒の実態や、ちよつとした手順の違いで失敗することは、私もよくあることだ。特に、これらのトレーニング教材は、一見何のためにやるのかわかりにくかったり、遊び感覚を取り入れるために、ただのお遊びに終わってしまう危険と隣り合わせの教材だともいえる。そのあたりの交流を深める中で、微妙なコツをつかみたいものだと思う。

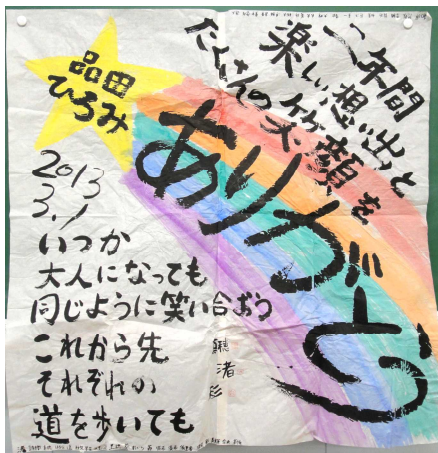
(2) 「卒業式に書道作品を飾ろう」

音更高校 野坂武秀

磯角実践でも、卒業記念作品の一端が報告されていたが、野坂報告でも似たような取り組みが、一本のレポートとして発表された。

野坂実践の中では、今までも卒業式に在校生が校歌の作品を書いてお祝いのために廊下に掲示するというものがあった。今回は、それにプラスして、卒業生が共同制作で、先生や後輩たちへのメッセージを作品化するというものだ。

全国の取り組みの中では広まってきている共同作品だが、北海道内では書道部が大作パフォーマンスに取り組むものはあっても、授業の取り組みはあまり見られない。場所や道具の準備がたいへんなためだと思われるが、今回の取り組みは、三年生の選択授業



という少人数で実現している。

四〇五人でグループを作り、全紙二枚(約一三〇cm四方)の大きな用紙に、背景にポスターカラーで色を塗ったりしてカラフルな作品に仕上げている。出来上がった作品は、二年生の校歌作品とともに、体育館会場への渡り廊下に展示された。作品内容もあるが、展示の方法なども今後への可能性を持つ。

(3) 「リズムを大切に作る書写指導」

音更高校 野坂武秀

この報告は、小中学校の実践報告が少ない中で、近隣の小中学校に出前授業に行ったり、開放講座として取り組んだものを発表している。

「リズムを大切に：：」という表題がつけられているが、これは、書写という授業が、整えた形で書くということに捕らわれてしまい、指導も画一的になるために、「習字嫌い」を多く生み出す原因を作っているのではないかとという警鐘である。

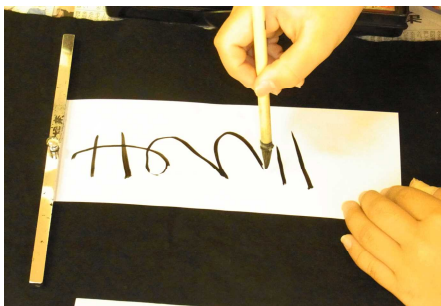
他方では、習字が得意という子どもの中にも、「手本がないとかけない」ということばを口にする者がかなりいる。これは、手本の物まねに終始し、文字の成り立ちや形の特徴を、法則や運動として学んでいないことの表れだ。

レポートの中では、毛筆書写の特性を生かして、最初に基礎訓練としての運筆トレーニングを取り入れ、リズムで形を整え

たり、文字の成り立ちから形を覚えたりする学習法を紹介している。

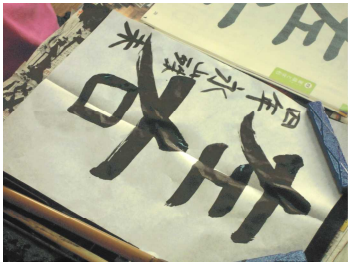
たとえば、現場では困難の多い中学生の小筆によるひらがな指導では、滑りの良いコピー用紙を使って、ラセンやスイングするジグザクを書かせ、さらにはあえて最初に中学生では書かせない「連綿(二文字続きの文字)」を書かせている。

中学生は、小学低学年で習うひらがな学習に対し、少なからず抵抗感を持つ。本当は、漢字よりひらがなの方が筆で書くのは難しいのだが、大人ぶりたい年頃の中学生にしてみれば、難しいという拒否反応を、「子どもくさい」ということばに置き換えて反抗する。この実践には、そんな心理へ



の配慮も含まれる。大人の階段を一步上らせながら、やさしそ
うで難しい小筆で書くひらがな学習へ導いている。

また、小学四年生の「左右」という文字を書く单元では、最
初に、文字の成り立ちを説明し、「左手」「右手」の形がそれぞ
れの文字になったので筆順も違うということを理解させてい
る。その上で、実技の時には、最初に書
かれる線が短く、後の線が長い「イチ、
ニー」のリズムを実感させるため、漢字
の「二」の文字を書かせたり、斜め線だ
けで短い線長い線を組み合わせたり、「空
書」という空中で腕を大きく動かして書
かせる基礎訓練を、リズムに合わせて全
員で取り組ませる実践を紹介している。



(4) 「小学三年生、毛筆書写の導入」

音更高校 野坂武秀

この報告も、前述の出前授業の延長線にある。ただ、小学校
の毛筆書写の導入は、年度初めにあたるために、なかなか調整
がつかずに取り組めないでいた。ところが今回は、前年に校内
研修で私の講座を取り入れてくれた校長先生が、早い時期から
調整してくれて、少し遅くなるけれども五月の連休明けに二時
間続きの授業にすることで予定を組んでくれた。

小学三年生の毛筆書写の導入は、用具の取り扱いから筆使い
まで、小学校中学校書写全ての基本になる。前述の中学生の小
筆のひらがな学習も、基本は同じところにある。教えたこと、
教えなければならぬことはたくさんあり、現実の四五分授業
ではそのうちどれだけ教えられるだろうか。ほんの少ししか教
えられないなら、そこには優先順位が発生する。しかし、既存
の教科書には、あれもこれもてんこ盛りで優先順位が示されて
いない。その優先順位を示したのがこの実践だ。

①用具のセットと筆おろし

初めての毛筆なので、もちろん道具の並べ方から始まり、硯
にたっぷり墨液を入れ筆おろしをする。この時のポイントは、
最近はやりのプラスチック樹脂製の硯を裏返して、海の大
きい方に墨液をたっぷり入れること。それによって、筆も根元ま
ですっきり墨をつけておろすことができる。

②筆慣らしのトレーニングとカタツムリの絵

最初のトレーニングは円運動。ラセンや渦巻きを書かしていく。右回り、左回り、線を細く・太く。この時の注意点は、一枚の半紙を書き終わるまでは、墨を付け足さない。高校生を教えていて感じる最も悪い癖は二つ。一つは筆を立てない、二つ目は線を引くたびに墨を付け筆を直す。

筆は、円運動を繰り返すと自然に立ってくる。筆を寝せると円はかけない。根元まで墨をつけると、かなり墨は持つので一筆で十分に書ける。教員研修でも先生方が最も驚くところだ。ここではまだ、筆の持ち方を教えていない。三〇人の指導に、しっかり筆を持たせるのは至難の業。最近の教科書では、指の一本がけ・二本がけのどちらも良いとしているので、ここでは



あえて指導しない。筆を立てせることを優先している。渦巻きを書いたらついでに「カタツムリの絵」。何か形になって残すことも大切。

③ジグザク運動と鬼の絵

円運動の次はジグザク運動。これも筆を立てせる効果と、ひらがなや漢字のオレの学習につながる。この時のポイントは、リズム良く、切れ味良く書かせること。私はそのために手拍子や「イチ・二・イチ・二」のかけ声をかける。最初はゆっくり、だんだん早く。線の太さを変えるのも効果的。

ある程度やったらもう一つ、ラセンとジグザクを組み合わせて「鬼の顔」。

④ひらがなに挑戦「あ」「あめ」「いぬ」

お絵かきとトレーニングだけでは習字にならないので、そろそろ文字に挑戦。しかし、最初は教科書のように漢字は書かせない。最初に漢字の「二」「土」を書かせると、どうしても入筆の筆使いに気をとられ、筆が斜めになり、一筆一筆筆を整えたくなくなってしまふ。だからまずはラセンとジグザクを生かした文字からということで「ひらがな」。ただし、小学三年でも





⑤ 後片付け

後片付けのポイントは筆洗い。ペットボトルに半分ほど水を入れて準備しておく。洗った筆をすぐに置けるように、机の上にも新聞紙などを用意させ、ペットボトルの中でジャブジャブ洗う。取り出すときに一工夫。新聞紙・反古紙か雑巾で、ペットボトルの口を押さえて、筆についた水分を落としながら引き抜くのがコツ。

と、後片付けまでして、カタツムリの絵、鬼の顔、「あ」「あめ」「いぬ」と五枚の作品を仕上げて一時間一五分。子どもたちは、きっと次の習字の時間が楽しみになったはずだ。

プライドはある。いくら初めての毛筆でも「ひらがな」は一年生の文字。そこで、子どもたちに難しいひらがなを答えさせる。「ね」「ぬ」「な」「あ」など出てくるが、最初は「あ」。そして二文字にして「あめ」。ちよつと変化させて「いぬ」と進む。「あ・め・ぬ」の形が似ているのは、元の漢字に「女」がつくから。高度な話しも少し入れる。

(5) 「文字と書の歴史入門」

音更高校 野坂武秀

この内容は、学校開放講座で、一般市民向けに実施している「書の歴史講座」の内容を、書写書道教員研修講座用にまとめたもの。各書体の基礎知識だけではなく、世界の四大文明とそれぞれの文字の特徴、文字は何のために作られたのか、という簡単な世界史の知識や、中国の歴史を交えながらのテキストになっている。書写書道の授業の中で役立つ内容だ。

三 討論の中から

今回も、冒頭に書いたように大学生の参加者が多かった。参加した大学生は、小学校・中学国語、特別支援を学ぶ教育大学の学生たちだ。彼らの参加した理由は、大学ではほとんど習わないからとか、小学生で良い思い出がないので教えるときに困るからというものが多い。そのため、今回のレポートは、とて



も興味深く学んでいったように見えた。ここに、書写教育の大きな問題点がある。教員養成大学にも書道の先生がいて少しは習うのだが、彼らの学びたいことは習えないというのだ。小中学校では、書写は教科科目ではないからだ。国語の中の一分野でしかないにもかかわらず、年間三〇時間以上の授業がある。せめて、この分科会で学習した程度の内容は、集中講義でも何でも良いので教員養成課程の中で実施して欲しいものだ。この現状では、書写教育の発展は見込めない。この現実を多くの人に知ってほしいと思う。

(音更高等学校)